



TITLE:

秦檜後の政治過程に関する若干の 考察

AUTHOR(S):

寺地, 遵

CITATION:

寺地, 遵. 秦檜後の政治過程に関する若干の考察. 東洋史研究 1976, 35(3): 447-473

ISSUE DATE:

1976-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153636>

RIGHT:

秦檜後の政治過程に關する若干の考察

寺 地 遵

はじめに

- 一 秦檜後の政局——沈該・湯思退政權とその性格
- 二 對金強硬論者の擡頭と權力中樞部の掌握
- 三 第二次宋金戰爭の開始と主和論者の復活
- 四 符離の戦い以後の政治過程

むすび——展望をかねて——

はじめに

金史は海陵王について、「海陵恃累世強盛、欲大肆征伐、以一天下、嘗曰、天下一家、然後可以爲正統」(卷二二九)、と述べている。南北統一の野望をいだいて、海陵王は金・正隆六年、宋・紹興三一年九月、六〇萬、號して百萬の大軍を興じ、南宋との全面戰爭を開始した。しかし、彼の願望は實現せず、同年十一月彼自身の暗殺、宋の高宗の退位と孝宗の即位など雙方主權者の交代という豫想外の結果を伴いつつ、戰爭は收束に向い、雙方の外交使節が往來し、金・大定五年、宋・乾道元年四月、「始謂上爲宋皇帝」^①とする國書が金使によつて届けられ、宋金兩國は平和共存關係を回復した。講和條件の中心は、兩國國境は紹興和議のものと同じとするが、名分上において宋が金に臣事する屈辱關係を修正し、「敵國之禮」、即ち對等的關係に兩國が合意した點にあった。

本稿は秦檜死後より終戦に到る間の宋朝側の政治過程を検討するものであり、権力中核體（即ち最高政策を選択・決定し、施行を統括する集團）の構成者と政策の選擇、更にそこに反映している種々の利害狀況などを追跡するものである。

宋代政治の特色として、君主獨裁制或いは集權的官僚支配體制などの指摘がなされているが、その構造の解明は必ずしも十分ではない。そして宋代政治史が豊かな成果を擧げ得ていない原因の一つとして、具體的政治過程に則しての権力中核體の構成、諸政策の選擇と利害狀況の關連性など、いわば政治史的検討の缺落が指摘できるのではないかと思われる。今ここでは紹興二五年より隆興、乾道初年にかけての政治過程を追跡し、諸政治勢力の對抗・葛藤の結果として隆興の和議が成立したことを明らかにし、南宋政治史、政治思想史に若干の展望を與えようとするものである。

一 秦檜後の政局——沈該・湯思退政權とその性格

紹興末年から隆興を経て乾道初年に到る間に激しく争つてきた主戰論・主和論は、紹興八—一一年、秦檜を中軸として争われた政争とは必ずしも連續していない。秦檜を中心にして進められた和議が第一次宋金和議とすれば、隆興の和議は第二次和議といえるが、この間に二十餘年の歲月が経過しており、活躍する人物も變化しており、兩論それぞれにこの段階での歴史的な性格を帯びていた。例えば第二次和議において主戰論の代表的な人物は無論、張浚であるが、彼は高宗・秦檜によって忌避され永州に閑居していた。しかし宋金關係緊張の狀況下で、孝宗の侍講であつた陳俊卿らが彼の中央政界復歸を強力に働きかけ、やっと復歸は實現している。一方、主和論の首魁である湯思退は紹興三〇年末、同じく陳俊卿を中心とする一派によって彈劾され、宰相を罷免され、中央政界から追放されていた。即ち、主戰論・主和論それぞれの構成者は、戦争の有無に拘らず、既に高宗の下できびしい對抗關係にあつたといえる。そして陳俊卿・虞允文ら孝宗の下で宰相にまで昇進した人々を含め、第二次和議における主戰論者は、秦檜没後擡頭した政治勢力であり、それ故にここでは一應、秦檜没後の政局から検討を進めてみたい。

「渡江而後、庶事草創、皆至檜而後定」、と稱され、第一次宋金和議以後十八年間宰相の位にあって、獨裁政治を行ってきた秦檜の死はそれだけで既に大きな意味を持っていた。檜没後、參知政事董德元・魏良臣・簽書樞密院事湯思退らは、「天下之事、皆人主總攬、人臣不過奉行而已」と上奏し、高宗の親政を願い出ている。そして「其間、通下情、正紀綱、修正事、皆出于上、而非有待於諸公之建明也」との評言があるように、親政は一應實現していた。しかし、檜死後の政局運営は、超絶した指導者を缺き、高宗および宰相・執政群らによる、いわば集團指導體制であったと考えられる。ところで、宋大臣年表（二十五史補編所收）を見ると、紹興二年より三二年六月（高宗退位）までの宰相は、万俟卨・沈該・湯思退・陳康伯・朱倬の五名であった。この中で、秦檜没後の高宗政權の性格を検討するに當って取上げるべき人物は、前三者であり、後二者は紹興末年の宰相でもあり、この部分での検討は必ずしもふさわしくないで別の箇所に譲るとして、ここでは万俟卨・沈該・湯思退の分析を以下、行ってみたい。

万俟卨は秦檜の岳飛攻撃に當って右諫議大夫・御史中丞として活躍し、參知政事に昇進し、秦檜親黨の有力な一員であったが、紹興一四年、卨と對立し祠職に落されていた。卨の死後、その對立者の政界復歸・再起用或いは死没者の名譽回復が專制の反動として顯在化し、万俟卨の復歸もこの流れに沿うものであった。彼は開封・陽武の人で、當時の權力中核體において西北流寓層の利害を代辯したものと考えられる。紹興二六年五月、沈該と共に宰相に任ぜられたが、翌年三月には死没しており、秦檜後の政治運営に大した痕跡は残していない。

沈該は秦檜没後間もない紹興二五年十二月、參知政事に復職し、翌年五月、左僕射即ち宰相となり、二九年六月、道義派官人群によって彈劾されるまで湯思退と共に權力の中樞にあった人物である。彼も秦檜と對立していた人物であり、參知政事に任命され參内した際に高宗は「秦檜何忌卿之深」、とわざわざ下問していた。初め潼州府にあった時に「專以商販取利」であり、知夔州の時も「營利尤甚」なので、參知政事に任命されたとの報が夔州に届いた時、人々は大いに驚いたという^⑨。また彼は吳興の出身であり、しかも吳興の有力者を背景とし、彼らの利害を中央政界で代辯する存在でもあっ

た。紹興二九年の彼を攻撃する文章は、彼が天資・人品ともに凡庸であること、賄賂を盛んに取ったこと、子弟を以て商賈を行い私利私欲を大に行つたこと、近親者・因縁者を登用したことなどを列擧し、更に、

近觀大理寺評事八員、而寄居雪川者五、類皆富室右族、豈無因而致哉^⑧

と、雪川、即ち吳興出身者が多く登用されていると述べている。また嘉泰吳興志・「吳興志・著姓」となる著姓によれば、彼は歸安の著姓であり、參知政事であつた時の事蹟として、

舊吳興丁身、歲輸三十有寄、公奏減五分之四、鄉人德之

と傳えている。吳興——歸安、即ち當時最も生産力の高い地域を代表し、その有力者層を背景として權力中核體に位置していたと言える。

湯思退は秦檜存命中の紹興二五年六月、既に簽書樞密院事として大臣群の一員であつたが、檜の死後、直ちに參知政事となり、二七年六月宰相に就任し、陳俊卿らによって彈劾され落職させられるまで左・右僕射——宰相であつた人物である。彼は處州・括蒼の人であり、

至若青田之潘集、平江之張築、會稽之詹承宗、括蒼之潘景珪輩、率家計鉅萬、厚以財賄肆行交結、思退或與之連姻、或與之補吏^⑨

とあるように、浙西・浙東の有力者層の支持を受け、密接な關係をもち、間違ひなく南宋政權が最も經濟的に依存していた江南——兩浙地方の地域的利害を代辯する存在であつた。また湯思退について注目すべき點は、彼がいつも一群の官人群を掌握していたことで、こうした意味で秦檜に近い體質をもっていたことである。隆興和議の際の一連の主和論系官人群は別としても、紹興二九年八月には張孝祥・黃文昌・張松・郭世模・江續之・韓元吉・左鄣らが湯思退の客として列擧されており、三〇年八月の陳俊卿の彈劾文には張孝祥・王晞亮・邵大受・方師尹・祝公達・沈介らが、汪澈の彈劾文には林覺・沈介・葉謙亨・方師尹・張孝祥・邵大受らがそれぞれ一黨として列擧されており、彼らが概して版曹であつたり治法に長

ずる人々であつたことは、湯思退が實務・財務官人群を把握していたことを示している。更に當時世間では、彼は「養家宰相」^⑧と呼ばれていたことからわかるように、私利の獲得においてもしたたかな才覺の持ち主でもあつた。當時最も經濟力の豊かさを誇つた地域は江南・太湖周邊地域であり、沈該・湯思退らは兩者共に四十四箇月にわたり權力の中樞部にあつて、これらいわば先進地を背景として行動し、その地域的利害を政權内に反映させる役割を果してきたといえる。

ところで秦檜没後の政權を一應、沈該・湯思退政權と呼ぶことは十分に可能であるが、彼らの國家運營の方針、特に外交・軍事政策は秦檜の設定した大綱を忠實に果すものであつたようである。秦檜は紹興二五年十月、遺表において、

願陛下益固鄰國之權盟、深思宗社之大計^⑨

と述べ、對金友好・共存路線の繼承を望んでいた。建炎以來繫年要錄卷一七二、紹興二六年三月丙寅に引く呂中の大事記は、沈該・万俟卨・魏良臣らを共に秦檜の黨と規定しており、

上謂魏良臣・沈該・湯思退曰、兩國和議、秦檜中間主之甚堅、卿等皆預有力、今日尤協心一意、休兵息民、確守勿變、以爲宗社無窮之慶、良臣等唯唯奉詔^⑩

或いは、

張浚主復讎、湯思退祖秦檜之說、力主和^⑪

とする記事などから、湯思退らの國政運用の方針は、高宗——秦檜の對金友好路線の忠實な繼承であつたことが伺われる。

二 對金強硬論者の擡頭と權力中樞部の掌握

前章において秦檜没後の政局を牛耳つた沈該・湯思退政權の性格を若干、検討してきたが、本章においては、その沈・湯政權の下で芽生え、成長し、最後には沈該・湯思退らを罷免に迫込んだ勢力——それは紹興末・隆興年間には主戰論集團を形成した——の擡頭について觸れてみたい。

さて、秦檜の死は一個人の死に止まるものではなく、秦檜路線に反対し批判的であつたさまざまな人物の政界復歸を意味していた。それは紹興の和議において敗北した人々は勿論のこと、秦檜に協力し政權に参加し、後に對立するに到つた人々、秦檜下の政權參加を一時見合せていた人々など多様な士人群の政界復歸を意味していた。本章では秦檜死後の多數の官人の復歸狀況を全て網羅することは出来ないが、後年主戰論を主張し、隆興和議の爭論に参加した人々、十餘名に限定して、彼らの政界復歸或いは參加の道筋とそれぞれの指導者としての特色を展望着してみたい。

辛次膺は鄱陽に寓居すること十六年、高宗親政と共に高宗の強い希望で紹興二六年二月、知婺州に復歸し、同年閏十月、禮部侍郎に、二七年一月、給事中に就任している。彼は萊州の人、「父之仇、不與共天、云々」と、金と和すべきでないとして上書したことがあり、岳飛とも往來があつた。禮部侍郎としては、邦國の大計を考えるに現在の財政は歳入・歳出共に極めて亂脈であるとし、「朝廷一歲中出入之數」は立てて定額と爲すべきことを求めていた點は大いに注目する必要がある。また隆興元年、參知政事として湯思退追放を主張している。更に王十朋の起用を孝宗に求めていた。^⑧

馮時行は紹興和議に反対して秦檜に憎まれ、十八年間野に在つたが、紹興二七年三月、知蓬州に復歸した。彼は四川・璧山の人で、同三一年七月、張浚の起用を高宗に強く求め、陛下は賢士大夫・骨鯁謀議の臣と艱難を共にすべしと主張していた。張浚が隆興初年末に構想した起用者一覽では「近臣」の項に含められていた。^⑨

金安節は紹興二五年十二月、知嚴州に復歸し、二七年二月、提點兩浙西路刑獄公事、同年九月、守大理少卿となつてゐる。休寧の人、殿中侍御史として嘗て秦檜の兄、梓を彈劾し、檜に憎まれ、久しく廢せられていた人物である。大理少卿としては、活民の道は徳教を先にし刑法を後にすべきであり、百官は法令を專用するのではなく、教化に資するものは大小なく必ず行ふべきことを詔敕として徹底させてほしいと望んでいた。後年の彼は主戰論者の中心人物であり、「金給事、眞金石人也」と張浚の稱贊を受けている。^⑩

王大寶は嘗て上呈していた詩書易三經解が高宗の意にかなない、紹興二五年十二月、守國子司業兼崇政殿說書に起用さ

れ、二六年十一月、知温州に就任している。國子司業時代の二六年二月、江南諸州の月椿錢・折帛錢のもたらす弊害を列舉し、諸路監司が月椿名色を覈實し、立てて定額と爲さんことを求め、また度牒販賣の停止を求め、高宗と對立していた。彼は潮州出身で、趙鼎・張浚・栻父子と學問上の往來があり、後年、孝宗下では湯思退を攻撃し、最も戰鬪的な對金強硬論者の一員であり、張浚の起用豫定者の一員でもあった。^⑧

虞允文は、紹興二六年一月、蜀中人材として沈該の推薦により通判彭州から知渠州となり、二八年十月、祕書丞に移っている。この期間、常賦以外の加斂六萬五千餘緡を奏して罷めさせたことが認められ、中央政界に登場することとなった。そして君道とは畏天・安民・法祖宗の三であると早速、上言していた。後年の彼は、紹興三一年八月、采石の戦いを指揮して金軍の渡江を阻み、一躍、名聲を得て主戰論の中心人物となった。仙井の出身で蜀系官人の代表者として孝宗時代、福建系官人の代表者、陳俊卿と共に數年にわたり宰相であった人物でもある。^⑨

主戰論者の中では大體、金安節と同行動をとった黃中は、紹興二六年六月、祕書省校書郎として面對し、百姓の疾苦・財用の蠹耗・官吏の貪汚などを述べ、同年十月、著作佐郎となり、徐々に頭角をあらわしていた。彼は邵武の人で、紹興三二年一月、禮部侍郎であった際、欽宗の喪禮をめぐる高宗と對立し、宰相朱倬が「上意實然、臣子務爲恭順可也」と言ったのに對し、「責難於君、乃爲恭耳」と答えていた。禮制にきびしく、一貫して對金親征論を主張していた。^⑩

杜甫の十三世の孫、杜莘老は紹興二六年十一月、魏良臣の推薦により、敕令所刪定官に充てられている。この折、時弊十事を論じ、その中で特に軍政の肅正、國防力強化を説いていた。彼は眉山・青神の出身で、以後再三にわたって金に備えることを今日の急務として主張しており、張浚の起用者一覽では、劉璘・王大寶と共に召還すべき人物とされていた。^⑪

張闡は紹興二七年八月、提舉兩浙路市舶に任ぜられ、二九年九月、御史臺主簿となっている。永嘉の人、朱熹が「其言金人世讎不可和者、惟胡右史銓・張尚書闡耳」と稱賛した人物であった。^⑫

陳俊卿は紹興二七年六月、校書郎兼普安恩平郡王府教授に祕書丞楊邦弼と共に任ぜられている。以後、三〇年六月、監

察御史、同年八月、殿中侍御史となり、時の宰相湯思退の追落しに大活躍している。また三一年一月、六月と再度、張浚は忠義者であり、文武兼ねた人物であると力辯している。興化軍莆田の出身、主戦論の中心人物で、孝宗時代、福建系官人群の代表者として宰相の地位にあった。朱熹を最も尊敬し、朱熹も彼のために行狀を著している。

汪澈は饒州・浮梁の人、紹興二六年八月、万俟卨の推薦で沅州州學教授から祕書省正字となり、同月、兼實錄院檢討官となった。三〇年二月、殿中侍御史となり、同年十一月、陳俊卿と組み、湯思退追放運動の中心となった。一貫した對金強硬論者で、三二年、參知政事に就いている。陳俊卿・王十朋らの推薦者であり、自分は寒微の出身であり、「所以報國、惟無私不欺爾」、と述べており、張浚らとは別系統の國家主義を濃厚にもっていた。

その他、隆興の和議に當って主戦論者の有力な一翼を形成した、樂清の人王十朋・晉源の人閻安中らは、いずれも紹興二七年三月の貢舉において、「鯁亮切直者」を上位におくべしとする方針に従ってそれぞれ一位・二位で進士となった人物である。また、陳俊卿・張栻・朱熹らと深い交友關係を結び、福建系の有力官人で、雪恥せざるを恨として没した劉珪も、紹興二八年四月、秦檜に追われて在った主管台州崇道觀より知大宗正丞に復歸していた。

以上、隆興和議において張浚を中心とする主戦論集團を形成した人々の秦檜没後の政界復歸或いは起用狀況をみてきた。次に、これら秦檜没後擡頭してきた對金強硬論者全般に通じる特色について若干、觸れておきたい。

まず、彼らはいずれも對金強硬論者であったが、その考え方は徽宗・欽宗兩帝の捕囚と胡地における死に對して復讐を誓うものであり、金は不倶戴天の讎であり、君臣父子の道を踏みにじるものに對する復仇であるとされていた。例えば王十朋は「今日之師、爲祖宗陵寢、爲二帝復讐、爲二百年境土、爲中原弔民伐罪、非前代好大生事者比」と述べている。また朱熹は力をこめて張浚行狀を記しており、そこで南渡以來、士大夫は和議を唱えているが、それは江南保守の計に過ぎず、そうした狀況下で、公（張浚）は

獨毅然、以虜未滅爲己責、必欲正人心、雪讐恥、（中略）、使天下之人曉然復知中國之所以異於夷狄、人類之所以異於

禽獸者。

と述べている。要するに、この系列の主張は道義論・復讐論に立っており、和するか否かについて妥協の餘地は乏しかった。

次に、彼らの出身地を調べてみると、當時の政權擔當者沈該・湯思退らの背景をなしていた江南・太湖周邊地域出身者の乏しいことに氣づく。紹興六年、豪右大姓の最も聚居している地域として、浙西では平江府・湖州・秀州・常州・江陰軍、浙東では紹興府・衢州・温州、江東の建康府・廣德軍などが指摘されていた。⑥即ちこれらの地域は最も生産力の高い地方であり、所謂先進地であった。今、列舉した十三名中、王十朋・張闡は永嘉、即ち温州系の官人であるが、兩者以外に兩浙系の官人は認められない。そして馮時行・虞允文・杜莘老・閻安中らは四川出身であり、黃中・陳俊卿・劉珙らは福建出身であった。數的にこの極く僅かな事例でもって斷定することは、勿論、慎重でありたいが、彼らの後年の活躍ぶりを考えてみると、隆興和議における主戰論の背景に四川・福建の連合勢力を想定することは十分に可能であると思われる。いずれにしても、この他、西北流寓系一（莘次膺）、廣東系一（王大寶）、江東南部二（金安節・汪澈）などを加えてみると、後の主戰論の有力者は概して經濟的後進地の出身者で占められていたと言えよう。隆興元年末の張浚の起用者一覽では、彼（成都・綿竹の出身）を含め四川・福建系は十七名中九名を數え、江南出身者は僅か一名（莫冲——湖州）のみであった。要するに、金との和平關係を重視した沈該・湯思退らは江南・太湖周邊の所謂、先進地を背景にもち、それに對立した張浚集團は四川・福建などを背景にしていたことが大雑把に觀察できる。

次に彼らの第三の特色は、概して彼らは學問的教養が高く、實務處理を得意とするよりは先ず教養人であり、學者であった。彼らは春秋によって讎敵許すべからずと説き、張浚・金安節は易に精しく、王大寶は詩書易解によって高宗の眼にとまり、黃中・陳俊卿・王十朋・張闡らは孝宗の教授・侍講・侍讀であり、張浚の子、栻を含め彼らの學問的交際は密であり、何らかの形で朱熹につながっていた。また彼らが教養人であり、德治を重視していたことは、當然、所謂能吏的官

人に對する強烈な反感となつて示されている。陳俊卿行狀は次の様に述べている。

又言、州縣之間、號爲能吏者、往往務爲急刻、專以趣辦財賦爲功、而視撫字聽斷爲不急、其間又有聚斂以爲羨餘之獻者、增市征則害商賈、督逋賦則病農民、甚或侵移常賦、貽患後人、朝廷不察、反謂有才、願有以深戒、戢之則天下之幸也。

彼らは能吏に反撥し、德治を主張していた譯であるが、こうした傾向は官僚界或いは權力中核體にあっては、財政・法律などの實務擔當より禮官・言事職を重視し、そこに結集し、そこを基盤として人事・政策決定などに發言し、政治の方向づけに影響を與えるという傾向を生んでいた。また高宗は秦檜沒後、專制の再現を防ぐため、「上監秦檜擅權之弊、遂增置言事官、(中略)、察官員、近世所未有」、と言事官を極めて重視していたが、そのことがこの傾向を一層促進させていた。

第四番目に彼らのこの段階での政治に對する姿勢を見ると、既述の如く所謂能吏に反撥していたが、能吏とは先の文章にも見る通り、徵稅・專賣などを強力に實施して中央に資金を送りこみ、私腹を肥やす官人群を指しており、德治を旨とする官人とは地方鄉村の利益を守り、集權主義に抵抗し、官界の綱紀肅正を要求する人々であった。先に王大寶が月椿錢の弊害を指摘し、その放縱な收奪に一定の枠を設けるべきことを主張していたこと、虞允文が知渠州として常賦外の加斂に反對したこと、黃中が百姓の疾苦・財用の蠹耗・官吏の貪汚を論じたことなどを指摘してきたが、これらは全てこうした姿勢を端的に示すものであった。こうした傾向は、紹興二五年十二月、御史王珪らの、地方からの收奪には一定の枠が設けられるべきことの要求、二六年二月の劉才邵・許興古・魯冲らの民間事情を汲み、酷吏を廢し、鹽稅他増稅はやめてほしいとする上奏文などと接續するものであり、向伯奮・辛次膺らが地方財政・國家財政それぞれに「以入制出」、「立爲定數」とする要求とも結びつくものであった。そしてこうした意見は例えば紹興三〇年十二月、經總制錢は過去十年間の平均額を以て定額とする決定などにおいて實現していた。從來、經總制錢は紹興一九年額を定額としていたが、これは秦

檜・曹冰が定めたものであり、過去の最高額を以て定額としたため、二六年、李邦獻が是正を求めて以来、賀允中・黃祖舜らが上言し、汪澈の強い要求と陳康伯の支持によってやっと實現したものであった。要するに、彼らは地方郷村の利益を守る立場から、放漫な財政に枠を設けることを求め、祖宗舊制の回復と遵守を求め、政治全般に一定の枠組み、即ち制度の確立を強く求めていたことは、これまた注目に値する傾向であった。

以上、駆け足ではあるが、秦檜没後、反秦檜を旗印にさまざまな官人が登場してくる中で、四川・福建など非先進地を背景とし、學術・傳統を尊重し、對金強硬論を主張する官人群が着實に己れの位置を固め、擡頭してきたことを述べてきた。そしてこの集團はやがて強力な政治勢力に成長し、宰相沈該・湯思退らを弾劾し、政權から追放するまでに到っている。

紹興二九年六月、大臣群の一員である知樞密院事陳誠之は、言事官によって「招集富商、出入門下」^⑤であるとして、辭職に追い込まれ、同月、同じ言事官によって沈該が彈劾・免職に追い込まれている。沈該は嘗て任地の蜀で「沈本」(沈本とは「蓋方言、以商賈爲本也」^⑥)と呼ばれるほど營利に熱心であると攻撃されていた。そして翌、三〇年十一月、湯思退が守侍御史汪澈・殿中侍御史陳俊卿・右諫議大夫何溥・右正言王淮らによって「養家宰相」と極めつけられ辭職に追い込まれていた。この湯思退追放によって非先進地系官人群は、もはや江南——先進地系官人群に對抗し、凌駕できるほどの勢力に成長していたことを明瞭に示していた。紹興三一年五月、金との緊張の高まりの中で御前會議が開かれるが、その會合の出席者、即ち權力中核體の構成員は凌景夏・汪應辰・錢端禮・金安節・張運・黃祖舜・楊邦弼・虞允文・汪澈・劉度・陳俊卿らであった、金・虞・汪・陳は既述の通りであり、黃祖舜は福清(福建)の人、論語に精しい學者官僚で、秦檜の子、煇の太傅號を取り消させ、經總制錢の減額定制度化を主張した人物である。楊邦弼は建安(福建)の人で、陳俊卿と共に孝宗の敎授に拔擢され、以後、多く陳と政治行動を共にした人物である。汪應辰は玉山(江東)の人、學者として名高く、呂本中・胡安國に學び、また趙鼎の弟子でもあり、張浚の政權構想では執政に豫定されていた人物である。劉度の

みは湖州・長興の人であるが、臺諫として有名であり、春秋の義によって孝宗に復讐を迫った人物である。これらいずれも對金強硬論者であり、會議出席者十一名中八名は主戰論者によって占められていた。要するに、時の權力中樞部は秦檜沒後擡頭してきた主戰論者によって占據されていた。

時の宰相は陳康伯・朱倬であったが、高宗・官僚層の與望は陳康伯に集っていた。彼は信州弋陽（江東）の人で、紹興二六年二月、知漢州から試尚書吏部侍郎に拔擢され、以後昇進を重ね、二九年九月、「沈本」と罵倒された沈該の後をうけて宰相に就任した人物である。高宗は「上謂康伯曰、卿靜重明敏、一語不妄發、眞宰相也」と稱贊しており、その人格を評價しての起用であり、この段階では彼も強硬論者の一人であった。しかし後年の隆興和議においては、南宋朝のおかれた大勢から和議を支持して湯思退・周葵・洪遵ら宰執群をまとめ主和論を展開しており、強硬論で一貫した人ではなかった。恐らくこうした陳康伯の柔軟な姿勢は四川・福建を中心とする強硬論者を必ずしも満足させるものではなかったであろう。主戰論者たちは彼らの輝ける指導者として、張浚の中央政界復歸を強力に主張しはじめたのもこの時期であった。勿論、對金關係の緊張の高まりが、南宋の主權者高宗をして張浚再起用を決意せしめたのであろうが、復歸の背景には單に狀況の切迫からだけではなく、彼の復歸を強く要請し、指導者として受容れる基盤が確立していたことに注目する必要がある。

紹興三十一年一月、陳俊卿は、自分は平素より浚を識っていた譯ではないが、彼の忠義と文武を兼ねた能力は認めるべきであり、更に今は老いて事に練れており前日の浚ではないとして、「願陛下勿惑讒謗、雖未付以大柄、且與以近郡、以係人心、庶緩急可以相及」と述べ、同年六月にも再度、「人皆以浚爲可、陛下何惜不一試之」と念を押していた。また同年七月、主戰論者の一人、知黎州馮時行は上書して、今日は賢士大夫・骨鯁謀議の臣と共に艱難を乗切るべきであり、「願陛下舍一己之好惡、勉用浚以副人望、決能使軍民回心、踴躍鼓舞、其效亦非小補」と、張浚の起用を強く要求していた。しかし、高宗は、「浚才疎、使之帥一路、或有可觀、若再督諸軍、必敗事」と、起用をためらっており、張浚が政界に復

歸したのは、やっと宋金戦争開始後の紹興三一年十月であった。彼は觀文殿大學士・判潭州に復歸し、翌月初め判建康府として對金最前線の指導者に任ぜられることとなった。

ところで高宗の紹興三二年の突然の引退、孝宗の即位は、主戰論者にとって好都合な出來事であった。高宗は秦檜と共に紹興和議をまとめ、その維持に努力を傾けていたが、代った孝宗は一貫した主戰論者であった。次に見る文章は兩者の差異をよく示している。

上（孝宗）每侍光堯（高宗）、必力陳恢復大計以取旨、光堯至曰、大哥俟老者百歲後、爾卻議之、上自此不復敢言（四朝聞見錄乙集、孝宗恢復）

孝宗幼年規恢之志甚銳、而卒不得逞者、非特當時謀臣猛將、凋喪略盡、財屈兵弱、未可展布、亦以德壽（高宗）聖志、主於安靜、不忍違也、厥後蓄積稍羨、又嘗有意用兵（鶴林玉露卷四）

孝宗の即位は、彼の侍講・侍讀・教授であつた黃中・楊邦弼・王十朋・張闡・陳俊卿らの主戰論者たちを勇氣づけ、彼らの發言力を強めたことは間違いない。また孝宗は積極的に張浚を起用し、隆興元年正月、樞密使に、同年末には宰相に任命していた。ところで張浚と孝宗との會いは次の様に記されている。

上手書召判建康府張浚、既見、上改容曰、久聞公名、今朝廷所恃惟公、浚言、人主以務學爲先、人主之學、以一心爲本、一心合天、何事不濟、所謂天者、天下之公理而已、必兢業自持、使清明在躬、則賞罰舉措、無一不當、人心自歸、強鄰自服、上竦然曰、當不忘公言、浚見上天錫英武、力陳和議之非、勸上堅意以圖事功、於是加浚少傅、進封魏國公、除江淮宣撫使、節制屯駐軍馬^⑤。

三 第二次宋金戦争の開始と主和論者の復活

金・海陵王は紹興三一年九月、號して百萬の大軍を率いて南下し、天下統一を企圖した。しかし金側の内部事情も複雑

で彼の意圖は實現しなかった。即ち同年四月以來、金の西北邊では南征のための壯丁徵發の抵抗に端を發する契丹人の叛亂が擴大・進行しており、また海陵王の專制に反對する勢力に擁せられた世宗が同年十月に遼陽で即位しており、海陵王の地位は不安定なものであった。そして同年十一月初旬、彼の願望をこめた揚子江渡河作戰も宋軍の善戰によって失敗し、十一月末には彼は部下により暗殺され、金の宋征服戰爭は頓挫することとなった。金軍は宋に和睦を申し入れ北歸し、代つて宋軍は金領内に進出し、戰局は一時少康狀態となった。この宋側有利の少康狀態の中で高宗は突然退位し、孝宗が即位したが、孝宗はこの際、大約、二つの選擇があり得た。一つは金からの申し出に應じ、金の内部混亂に乘じ有利な内容の平和條約を結ぶことであり、今一つは軍事的壓力を強化し、宿願である復讐を試みることであった。結局、宋は二者擇一することなく、まず後者を試み、契丹人の叛亂を鎮壓して（紹興三年九月）再び南下して來た金軍と相對峙し、決戰を挑み、壊滅的敗北を受け（隆興元年五月、符離の戰い）、前者の道即ち和平交渉が本格化し、第二次宋金和議が締結されることとなった。本章ではここで述べた期間——開戰より條約締結まで——の宋側の動きについて若干の展望を與えたいと思う。

開戰直前の段階で既に權力中核體の主導權を握っていた對金強硬論者にとって、戰爭開始は忌避すべきものではなく、むしろ歡迎すべきものであったことは當然である。しかし、この海陵王の一方的企圖による戰爭は宋側に豫想外の影響を與え、結果をもたらした。即ち戰爭の計畫的遂行は觀念的・主情的復仇論では不可能であり、特に巨大な軍費が徵達されねばならず、それに伴い軍費徵達を處理しうる能力をもった官人群——主戰論者の忌諱していた能吏層——の協力が絶対に必要となり、そのため彼らが一旦、政界から追放した人物、例えば湯思退などが政界に復歸し、戰爭指導・戰爭終結を爭點として再度鬭争するという事態に到ったことである。

南宋の軍事力は傭兵軍であり、傭兵を動かすには財貨を必要とした。例えば興元府駐劄御前右軍關係者は、諸軍の鬭志は鈍く、戦心も旺盛でないとし、

大率目今事勢、與前時異、不立重賞、何以責人於死事、乞詳酌事機、別與措置^④。

と特別の賞賜を求めていた。無論、主戦論者たちも軍事費徴達を看過していた譯ではなかったが、彼らの財政に對する提言は概して節約の奨勵であり、獻納の呼びかけの域を出なかった。紹興三年六月、御史中丞汪澈は

又言軍旅將起、費用方繁、今局務之可省者尙多、支費之浩翰者尙廣、百官之冗員尙衆、官府之橫用尙煩、宜條其不急、大加節約、以徇今日之務^⑧

と述べ、開戦直後の同年十月、殿中侍御史杜莘老は

乞令勦臣戚里內侍之家、獻家財以助國、仍加優賞^⑨

と提言していた。しかし實際の戦費徴達はそのようなものではなく、茶鹽酒の專賣強化であり、月椿錢・經總制錢の徹底徴發であり、空名告身・度牒の販賣であった。呂中は皇朝中興大事記卷一、養兵の項で次の様に論じている。

經費之大、莫於養兵、足食足兵、今日之先務也、國家經度措置、無一不以養兵爲言、紹興二年茶鹽權酤之入、仰以養兵也、經制總制之錢、以助軍需也、上供盡於諸路、鹽鈔盡於福建、錢引盡於四川、月椿重困於江浙、(中略)、甚者、空名告身、誘富民之糴、而內帑物帛亦以充贖軍矣

事實、賣官鬻爵を盛んに行い、また四川の常平義倉米六十餘萬石を軍食に充て、江・浙・荊湖諸路の坊場淨利錢三八〇萬緡を賞軍に備えさせるなど戦費徴達に狂奔していた^⑩。特に度牒の賣出しは秦檜時代、既に廢止していたものを再開した譯で、事態の切迫を物語るものであった。

またここで注目すべき點は、賣官・專賣・徵稅の強化などによる收奪形式は秦檜後擡頭してきた主戦論者たちの主張とは本來、矛盾するものであったことである。彼らは既述のように地方鄉村の利益を守り、集權主義に抵抗する立場で地方財政・國家財政ともどもに放漫な擴大化は避け、一定の枠組みを設け、冗官冗兵の整理をし、節約を旨とする財政觀を持っていた。しかし戦争の開始は彼らの年來の主張を實行する機會を失わせることとなった。彼らにとって對金戦争そのものは望むところであったとしても、戦争遂行のための國家動員計畫、特に戦費徴達についての展望は缺如しており、戦争

を遂行すべきだとする年來の主張と、如何にして戦争を行うかという具體的課題との間の乖離——この乖離・矛盾は南宋一代を通して解決されることはなかった——に直面することとなった。

次に開戦のもたらした影響の第二點は、權力中核體に再び湯思退ら嘗て追放した官人群の返り咲きを認めざるを得なくなったことである。秦檜後の政權擔當者と擡頭勢力との争いは、同時に實務派官人群と道義派官人群との對抗でもあり、開戦直前に後者が前者を凌駕したことは既述の通りである。だが戦争の開始は巨大な戦費徴達を必要とし、その徴達技術に長じている官人群を必要とし、實務系官人群の協力なくしては戦争は遂行できないことも明らかにした。戦争必至の紹興三一年七月、言者の論は、

今之所謂郡太守者、平時援資格而來、簿書期會、僅足趣辦、若一旦有征行調發之煩、供億饋餉之擾、比閭糾集之政、

在朝廷意慮之外、及約束之所未至者、求其機權足以應變、威信足以服衆、強力足以集事、愷悌足以宜民、而能弭患於

未形者、蓋十無三四^⑤。

と述べ、不適任者の罷免を求めていた。主和論者の一人、王之望は四川財賦總領時代、「軍書旁午、調度百出、之望區畫無遺事^⑥」と稱されていたが、まさにこのような人物を戦争は必要としていた。

先に陳俊卿・汪澈らによって彈劾・免職された湯思退が觀文殿大學士に復され、醴泉觀使兼侍讀として再び政界に復歸したのは、紹興三一年十月末、張浚の起用より數日早かった。そして二旬近くたった同年十一月、高宗親征後の首都・臨安を管掌する行宮留守に充てられている。彼が復歸した理由について、各種史料は概して沈黙している。しかし戦争の開始が江南を背景とする政治勢力の協力、或いは絶えず對立關係にあった孝宗すらも「朕愛其警敏^⑦」と評價せざるを得なかった彼の實務處理の俊敏さを必要としたものであることは十分に推測できる。彼は行宮留守に就任するや直ちに行宮留守印の鑄造や各種事務處理の方式を整え、趙子瀟・呂廣問・芮燁・鄭樵・吳祇若・韓元吉らの人事異動——それは新しい彼の集團の誕生を意味する——を願出て、裁可を得ていた。また高宗が主戦論者に擁されて建康親征に出發することに、欽

宗の耐廟の祭祀が未だ行われていないことを理由に反対し、禮部侍郎黃中と爭論している。^⑤この時は高宗は黃中の意見を取っていたが、建康滞在僅か一箇月で欽宗耐廟を理由に、親征扈從集團——對金強硬論集團の大反對を押切って臨安に歸還しており、強硬論者と高宗を切離すという湯思退の目論見は實質的には成功していた。それはともあれ、湯思退の復活は彼個人の復活に止まるものではなく、湯思退集團、即ち先進地を背景とする財務・實務系官人群の復権を意味していた。紹興三〇年十二月、湯思退彈劾に際して汪澈より、その一黨として併せ論難された吏部侍郎沈介（吳興の人）は、三年閏二月、知永州に、起居舍人葉謙亨（括蒼の人）は三年一月、江南東路提點刑獄公事にそれぞれ充てられている。また刑部尙書、戸部尙書、知臨安府、知建康府などの要職を歴任したことのある韓仲通は、湯思退追放直後（紹興三年正月）、陳俊卿によって「起於法家、專務刻薄、（中略）、湯思退秉政、以其同出其氏之門、特引援之」^⑥と彈劾されたが、三年には知明州に復歸していた。^⑦また嘗て戸部侍郎として活躍し、彈劾・免職されていた鍾世明も淮南路轉運判官に復職しており、これなども能吏復歸の波に乗った事例である。要するに、宋金戰爭の開始は軍費徴達を始め、さまざまな實務處理を必要とし、そのことは道義派官人が輕視し蔑視していた能吏系官人の協力を當然に必要とし、そのことによって開戦直前の段階で政界から追放した湯思退を指導者とする勢力の復歸を容認せざるを得ないという皮肉な結果を招くこととなった。勿論、復讐論を説く張浚を指導者に迎え、宿年の屈恥の一掃を期している孝宗の即位を見、意氣上がる強硬論者に對して、當面、湯思退らの一黨は正面切った抗爭を挑むことは不可能であったが、開戦を契機に彼らは一定程度の勢力を再結集し、權力を掌中にする機會を待つという狀況が現出していた。

四 符離の戦い以後の政治過程

隆興元年三月、金軍は書狀で以て、内亂のため金軍が北歸した後、宋が占領した海・泗・唐・鄧四州の返還を含め、紹興一一年の和議に復すことを求めてきた。この段階で金の申し出に従って和するか否かの二者擇一が即位して間もない孝

宗に迫られた課題であった。そして恢復の意氣にもえる孝宗、樞密使・都督江淮東西路軍馬に任命され兵權を掌握していた張浚は、この際、一氣に決戦を挑み、中原回復の宿願を果す方針をとった。具體的には張浚は四月初め入見し、出師渡淮の計の裁可を得て、五月初めには李顯忠軍を靈璧縣攻略に、邵宏淵軍を虹縣攻略に送りこみ、それぞれ奪取し五月半ばに宿州占領に成功した。しかし金軍精銳部隊の南下と、李顯忠・邵宏淵兩將の對立による宋軍の分裂は宿州防衛戦を困難なものとし、五月末、符離において宋軍は潰滅的敗北を喫した。この敗戦は、「符離之師、將士失律、渡江以來所造器甲、委弃殆盡、戰馬十喪七八、士卒死亡莫知其數」と記されている。

この敗戦は即位間もない孝宗、宿願達成を目論む張浚にとっても大打撃であり、六月、孝宗は己を罪するの詔を下し、張浚は樞密使・都督江淮東西路軍馬免職の譴責處分を受けることとなったのは已むを得なかった。一方、湯思退は七月初め宰相兼樞密使に返り咲き、主和論者が彼の下に結集し、先の金の申し出を受けて和平回復の交渉開始に事勢が動いて行ったのも當然の趨勢であった。

またこの作戰計畫遂行において注目すべきことは、張浚の獨斷專行の行動様式である。協調性を缺く二將を起用・重用したこと自體戰爭指導者としての彼の力量の限界を示していたが、一層重要な點は彼が官人群・官僚機構の全面的支持・協力を取り付けることなく、孝宗に決断を迫り、強引に作戦を進めた點である。張浚と時の宰相史浩は出兵計畫をめぐって爭論し、「詰難凡五日、浩委曲勸浚、曰、明公以大仇未復、決意用兵、此實忠義之心、然不量力而圖之、是徒慕名爾、(中略)、浚曰、吾老矣、浩曰、(中略)、明公先立規模、使後人藉是有成、亦明公之功、何必身自爲之、浚默然、明日浚奏、浩意不可回、惟陛下英斷、帝於是不由省院、徑檄諸將、出師」となった。張浚は孝宗即位に際して、人主の學は一心を以て本と爲すと説いており、政治の根本は皇帝の決断——心性にかかわっているとする立場からすれば、官僚の意見聴取に意味を見出さなかったのは當然と言えるが、史浩の言う通り「量力」・「先立規模」を缺く行動であった。またこの時の彼の行動は孝宗の教授を経て宰相となった史浩を無視するものであり、高宗の「毋信張浚虛名、彼專以國家財力名器、爲一擲耳」と

する孝宗への忠告の通りに結果した。そして省院即ち三省・樞密院の預聞しない軍事行動を興し、反対した宰相史浩を主戦論者の一人王十朋をして彈劾させ、辭職に追いこんだことは、當時の權力中樞部を分裂させることでもあった。史浩は四明の出身で湯思退グループとは本來異質な孝宗側近層の一員であり、孝宗即位と共に參知政事・宰相となり、官人群統の任についた有力者であった。それ故、孝宗―張浚―王十朋の線による史浩彈劾は孝宗側近層の分裂、官人群特に兩浙系官人の張浚非協力を結果として生むこととなったと言える。

また張浚の行動は對金強硬論集團の中でも十分な支持を受けるものではなかった。「張浚初謀大舉北伐、俊卿以爲未可、(中略)、邵宏淵果以兵潰」と陳俊卿も危惧の念を示しており、宋側の全面的支持を受けていなかったことが、宋軍大敗の構造的原因として指摘することもできる。

いずれにしても湯思退は宰相に復歸し、大勢は徐々に和平交渉へ向い、講和條件の具體化の方向に進展して行つた。この間の細かい過程は省略するが、隆興元年十一月には議和の詔が下され、侍從、臺諫の意見が徴され、宰執(陳康伯・湯思退・周葵・洪遵)らは軍民の休息と自治の計を建言し、^⑧ ほぼ和議が權力中樞部において大勢を占めるに到つた。

さて、次にはば趨勢が定つた隆興元年冬段階で權力中核體における主和論者の性格についてしばらく検討を加えておきたい。

主和論の代表的人物は湯思退であるが、この段階での主和論者を全て湯思退集團として割り切ることはできない。既述の様に張浚の獨斷專行に反撥し、反張浚―反主戰論―慎重論を取る人物もあったし(例えば史浩)、符離の敗戦後の國情を考慮し和平に傾く意見もあつて(例えば陳康伯・周葵など)、一様に斷じられない。しかし主和勢力の指導者は湯思退であつたし、彼を支える集團が何であつたか明らかにする必要がある。ところで、隆興元年十一月、議和の詔に對し和すべきことを積極的に提言した人々は、吏部尙書凌景夏・戸部尙書韓仲通・權吏部侍郎余時言・刑部侍郎路彬・監察御史尹穡らであつた。そしてこの時の意見陳述には顔を出していないが、當時、戸部侍郎兼都督府參贊軍事であつた王之望、戸部侍

郎兼樞密院承旨の錢端禮らを加えることが出来る。彼らはいずれもその官職名から察知される通り實務處理に長じた官人であり、彼らこそ宰相湯思退を支える集團であつた。

凌景夏・余時言・路彬らで注目すべきことは、彼らは紹興三一年十月の高宗親征扈從集團——當時の對金強硬論集團——に名を連らねており、この點から見るといわば主戰論から主和に軌道修正を行つていた。

韓仲通は先に陳俊卿によつて秦檜—湯思退一黨として追放され、開戦と共に復歸した人物として紹介した。彼は刑部・戸部關係を中心に活躍し、重修茶鹽敕令格式を詳定するなど、主に法律關係に明敏さを示した實務派官人であつたが、彼についてのまとまつた記述は殘されていない。

王之望は本來、襄陽・穀城の人であつたが、紹興三年台州に居を移しており、實質は台州出身と同じであつた。彼は長年、總領四川財賦として敏腕をうたわれており、「之望區畫、無遺事」と稱せられていた。隆興元年、戸部侍郎兼都督府參贊に充てられ、南北均衡論を提唱し、湯思退を喜ばせたこともあつた。二年九月、參知政事に昇進し、「力附和議、與思退相表裏、專以割地啖敵、爲得計」と、後世評せられるほど、湯思退の片腕として活躍していた。

錢端禮は、行狀は本質を開封としているが、他書は臨安或いは餘杭としており、史浩などと交際をもち、江南に大きな聲望をもつ人物であつた。彼は吳越王錢俶の六世の孫であり、高祖は文人として名高い錢惟演であり、祖父景臻は仁宗の大長公主を妻女としており、彼の娘は孝宗の皇太子夫人に充てられるなど第一級の名門であつた。假令、開封が本籍であつたとしても、五代・吳越王の後裔として浙江地方に大きな聲望をもつ人物であつた。しかし彼は紹興三年、添差通判台州に充てられて以來、一貫して實務系官人としての經歷をたどっており、道義派官人との交渉は乏しかった。紹興三一年、戸部侍郎兼權知臨安府時代に東南會子の官營化、即ち民間發行の便錢會子を臨安府營化する一種の紙幣發行計畫を實施し、「公營建明用楮爲弊、至是專委公經畫、分爲六格、出納皆有法」と行狀は傳えている。隆興二年、吏部侍郎となり吏部尙書韓仲通と連合して張浚と戰費徵達について激論を交わし、張浚に對抗していた。同年末には參知政事に昇進し「時

久不置相、端禮以首參、闕相位、甚急^⑤」と評されるほど權力中樞部の中心人物にのし上っていた。宋金戦争については「在今日和之爲利、南北均焉」と考え、また「金人必和」或いは「欲和本出彼意、若必欲和、定無意外」と主張して、金を信用すべきでないとする虞允文など強硬論者の説を退け、對金交渉の焦點を、一、正位號、二、定名分、三、減歲幣の三點にしぼり、遂に和議成立に到らしめていた。要するに錢端禮は吳越王の後裔で皇室の外戚に當る名門出身者であり、更に浙江に聲望をもつ官人であったが、官僚としては一貫して實務系であり、南北兩立の展望をもって和議を推進した人物でもあった^⑥。

ところで湯思退の背後には兩浙系の實務處理に長じた官人群が控えており、これらが張浚を中心とする主戰論を押え、和議の方向に動かして行つたと言えるが、これだけでは紹興末年の「新興道義派主戰論」對「秦檜路線繼承者」の葛藤のくり返しであり、主和論側に隆興和議を成立せしめるだけの力量があったとはいひ難い。そうした點で注目すべきことは、主和論側が湯思退を中心とする勢力だけでなく、史浩・陳康伯・周葵・洪遵ら湯思退集團とは異質な、いわば中間派或いは政界長老層を含み、彼らに支持されていたことである。

陳康伯は金軍侵入に際して黃中と共に親征を主張したことがあり、湯思退追放を叫ぶ太學生らも彼には信賴しており、強硬論者も一定の評価を與えており、當時六七歳、政界最長老の指導者であった。また陳康伯は弋陽の出身で、洪适・洪遵と共に江東南部の人で、兩浙先進地を背景とする勢力とは一線を畫しており、張浚―陳俊卿―虞允文を中核とする四川・福建連合勢力とも距離を保っている存在であった^⑦。周葵は當時、六五歳、常州宜興の人であったが、湯思退系の官人とは無縁であり、隆興年間「時參知政事周葵、實行相事^⑧」と稱せられたこともあり、大きな聲望をもつ人物であった。しかし彼は「始終守自治之說^⑨」と言われ、概して對金問題には慎重であり、張浚を支持することはなかった。

結局のところ以上の検討を通して言える點は、隆興の和議を推進した政治勢力としては先ず湯思退の下に結集した韓侂通・王之望・錢端禮ら實務派官人群を擧げることができる。彼らは、湯思退―處州・越州・平江府、王之望―台州、錢端

禮——越州、史浩——明州という様に浙江各地域を背景にしており、その意味で和議は江南・兩浙地域の要求であつたと考えられる。そしてこれらの勢力に陳康伯ら非兩浙系——中間派が加わることによって張浚——陳俊卿——虞允文らの四川・福建連合勢力・道義派官人群を一時的に押えこみ、和議は成立したといえよう。

むすび——展望をかねて——

いささか大雑把な記述ではあつたが、秦檜の死から宋金戦争の開始と和議成立の前夜までの政治過程を、特に權力中核体内部の勢力の配置と對抗関係および政治路線の變遷を中心として述べてきた。即ち秦檜没後、秦檜路線を基本的に繼承する高宗・沈該・湯思退らの集團指導體制が取られてきたが、その下で嘗て秦檜に對抗し追放されていた士人群が復歸し、彼らの中から對金復讐論を主張し、内政・外交ともに反秦檜路線を提唱する勢力が漸次擡頭し、紹興末年までには沈該・湯思退らを彈劾し權力中核體の大勢を制するまでに成長していた。金・海陵王の野望に起因する第二次宋金戦争の開始は、對金強硬論を説く擡頭集團に好都合であり、孝宗の即位は彼らを一層、活發化させるものであつた。しかし戦争の開始は、同時に戦争遂行の必要上、實務派官人群の協力を必要とし、その頂點に立つ湯思退および彼の一黨の政界復歸をもたらすという思わぬ結果を生むこととなった。主戦論者は彼らの指導者として張浚を迎え、金側の内亂・叛亂によって宋側が優利な状況にあつたことにも助けられ、權力中核體の指導權を把握していた。しかし張浚——孝宗によって官人機構を輕視し、その支持・協力無くして行われた隆興元年の作戦計畫は完全な失敗に歸し、宋軍は潰滅的打撃を受けるに到つた。そしてこれを機會に雌伏していた湯思退ら主和論者は實務派官人群の協力を得て再び勢力を回復し、四川・福建を中心とする主戦論でもなく江南を背景とする主和論者でもない中間勢力・政界長老層の支持を得て、隆興元年末にはほぼ和議路線を確實にするまでに到つた。

以上が本稿で述べたことの概要である。以下、本稿の構成上必要な部分を若干補足しておきたい。

張浚は符離の敗戦によって譴責處分を受けたが、彼を支持する勢力は健在であり、彼の政界復歸を推進した陳俊卿の再度の努力により、張浚は軍事指揮權を回復し、隆興元年十二月には湯思退と並び宰相に到っていた。しかも「公恩遇獨隆、每奏事、上輒留公與語」^⑨と孝宗の厚い親任を受け、孝宗の建康親征を計畫し、權力中樞部を自己勢力で占據する試みなどに着手していた。しかしこれら強引な計畫は上皇（高宗）・湯思退・王之望・錢端禮・韓仲通ら主和論者・實務派官人の強烈な抵抗を受け、また陳康伯ら中間派の支持も得られず失敗に終り、逆に御史尹穡によって「公所費國用、不貴」^⑩と彈劾され、宰相を追われ間もなく死を迎えることとなった（隆興二年八月）。張浚の死は對金強硬論者にとって輝ける指導者の喪失を意味し、中心人物の喪失は政治力の低下をもたらし、後繼者虞允文らの抵抗を排して、湯思退に代った錢端禮（湯思退も同年十月没している）らの努力によって隆興二年十二月、和議締結は成った。

ところで秦檜没後から隆興和議の成立或いは張浚・湯思退の死までの政治過程を追跡する意義の一つは、南宋政治史を考察する上で極めて重要である權力中核體編成の非一元性、少くとも權力中核體が複数の政治勢力の複合體としてあることを歴史的に確認することにあると思う。周知の如く、金の侵寇や流賊の横行によって一旦喪失した宋朝の集權的支配體制を回復させる上で最大の努力を拂った人物は秦檜であった。そしてここで注目すべきことは彼の權力中核體編成の特色が、己れと異質の存在を許さない、徹底した獨裁體制であったことである。しかし彼の没後數年の政治過程を経て誕生した孝宗下の權力中核體は單一の政治勢力が占據するというのではなく、對抗勢力を含みつつ構成される形式に變化している。それは本稿の趣意に合せて言うなれば、主戰論と主和論が對抗しつつ共存するといった事態の發生である。

主戰論系の思想はその最も組織立てた議論を展開した朱熹の整理に従えば、金は中國の不倶戴天之敵であり、金と戦う目的は徽宗・欽宗の復讐を遂げるためであり、それは天理である君臣父子の性の具體化としてあるのであり、胡銓によれば三綱五常を守るためのものであった。しかし他方では朱熹は民の休息を求め、「民力已殫而國用未節」と考えていた。即ち彼は集權的國家による鄉村收奪に對して強い抵抗の姿勢を示していた。そしてこの兩論は必ずしも兩立するものでは

なかった。鄉村の累積の上に國家を設定し、その構成體が三綱五常で維持されるのであれば、その否定者である金は許すべからざるものであり、ましてや金を認め金と交渉する一派は全く容認しえないものであった。しかし具體的に戰爭を目論むならば國家動員と巨費が必要であり、そのことは集權的體制を必要とし、專賣制など商業的手段による鄉村の收奪を意味しており、更に末作・末業の盛行、商業主義の鄉村内への浸透を意味し、鄉村秩序を根底から動搖させるものであった。要するに主戰論——朱熹の議論は根底的には鄉村主義の立場であり、鄉村の秩序原理に基盤をもつ對金強硬論と、鄉村構成員の生活の安定を求め集權的收奪體制に抵抗する側面とを併せもっていた。そして兩者は現實には兩立しがたい傾向を秘めていたが、政治的選擧としては同時に雙方を満足させるのではなく、力點を移動させて破綻を回避することもありえた。今、隆興和議後の主戰論者の議論を概観してみると、彼らは後者、即ち民の休息に力點を移動させていたようである。張浚の子、桢・劉珙・陳俊卿・黃中・朱熹といった人々は、いずれも現今、民力の涵養が大事であるとして、孝宗・虞允文らの對金挑發の傾向に抑止的態度を強くとっていた^⑤。そして主戰論者の相當部分が金に對して慎重な態度をとるようになった傾向こそ、權力中核體が異質な勢力の對抗的共存によって構成されることが可能となる大きな條件であったと考えられる。他方、主和論および中間派的側面から考えてみると、彼らは宋金の國力を量ること、國家財政・戰爭財政維持の方途など極めて現實的觀點から宋金關係を展望していた。そしてその結論として「在今日、和之爲利、南北均焉」（錢端禮）とされ、戰爭の繼續は民力貨財を浪費し、兵威を増して國勢を弱めるものであり、「使軍民各就休息」（陳康伯）ことが至當とされた。要するに和議推進派も民力涵養を議論の中心においていた。和か戦かと言えば大きな違いがあったが、民力涵養・民の休息を政治目標とするならば、主戰論・主和論・中間派の間に大差はもはやなかった。隆興和議が張浚の死と相表裏して成立した背景には、こうした關係、特に主戰論側の力點の變化が設定できるように思われる。

だが、湯思退後の主和論の中心人物となった錢端禮をとって考えてみると、彼は既述の如く南宋通貨政策に深く係わっており、また呂頤浩とも深いつながりのある人物であった。呂頤浩は惡名高い經制錢徵集を戸部尙書として推進し、高宗

時代初期の財務行政を代表する人物であった。その他、王之望・韓仲通・史浩ら錢端禮をとりまく人物群は、概して國家運営の基礎を商業主義的收奪、即ち專賣制・通貨制度・各種雜稅收奪の強化に求める傾向が強く、その意味で超鄉村主義的色彩を色濃くもっていた。この點、先の鄉村主義的傾向の強い主戰論系の官人とは異質の存在であった。そしてそれはまた先進地と後進地という背景の差異であった。しかし宋王朝が兩者、先進地と後進地、鄉村と都市の並存の上に成立している限り、一方が他方を如何に論難したとしても否定しすることは不可能であり、時に爭點は移動しつつも、權力中核體は兩者の對抗的共存關係によって構成されねばならなかったのである。結局のところ、隆興和議成立に到る政治過程を分析する意義の一つは、こうした南宋朝政治史の重要な形態の成立を摘出することにあつたと言える。

註

- ① 宋史全文續資治通鑑（以下、全文と略稱）卷二四、乾道元年四月是月の條。
- ② 和議成立は隆興二年十二月である。攻媿集卷九二、觀文殿學士錢公行狀は十二月甲午、「降詔和議已定」としている。乾道和議と稱するむきもあるが、筆者は隆興和議として記述して行きたい。
- ③ 紹興八年、十一年兩次の和議を總稱する。
- ④ 呂中撰、皇朝中興大事記卷一、「行朝會禮」の付注。（靜嘉堂所藏抄本による）
- ⑤ 建炎以來繫年要錄（以下、要錄と略稱）卷一七〇、紹興二五年十一月庚午の條。
- ⑥ 皇朝中興大事記卷一、「檣死後擢用參政宰相」の付注。
- ⑦ 徐自明撰、宋宰輔編年錄卷十六、紹興二五年十二月甲午、沈該參知政事の項。
- ⑧ 要錄卷一八二、紹興二九年六月戊申の條。
- ⑨ 要錄卷一八七、紹興三〇年十二月丙午の條。
- ⑩ 同右。
- ⑪ 要錄卷一六九、紹興二五年十月丙申の條。
- ⑫ 要錄卷一七〇、紹興二六年十二月乙未の條。
- ⑬ 宋史卷三八九、張孝祥傳。
- ⑭ 要錄卷一七一、紹興二六年二月甲午の條、宋史卷三八三、辛次膺傳。
- ⑮ 要錄卷一七六、紹興二七年三月丙子、同卷一九二、三一年八月甲辰の條。
- ⑯ 要錄卷一七〇、二五年十二月辛巳の條、宋史卷三八六、金安節傳。
- ⑰ 要錄卷一七〇、二五年十二月丙子の條、宋史卷三八六、王大寶傳。
- ⑱ 要錄卷一七一、二六年正月甲子の條、宋史卷三八三、虞允文傳。

19 要録卷一七三、二六年六月甲戌、卷一九七、三三年二月丙寅の條、宋史卷三八二、黃中傳。

20 要録卷一七五、二六年十一月丙子の條、宋史卷三八七、杜莘老傳。

21 要録卷一七七、二七年八月丁未の條、宋史卷三八一、張闡傳。

22 要録卷一七七、二七年六月壬戌の條、宋史卷三八三、陳俊卿傳。

23 要録卷一七四、二六年八月丙申の條、宋史卷三八四、汪澈傳。

24 要録卷一七六、二七年三月丙戌の條。

25 要録卷一七九、二八年四月辛亥の條。

26 宋史卷三八七、王十朋傳。

27 朱文公文集卷九五下。

28 宋會要、職官三九の九、紹興六年四月十八日の條。

29 朱文公文集卷九六。

30 要録卷一七一、二六年正月丙寅の條。

31 要録卷一七〇、二五年十二月丁酉の條。

32 同卷一七一、二六年二月癸酉、甲戌の條。

33 同卷一七四、二六年八月辛未、同卷一七五、二六年十一月癸酉の條。

34 同卷一八七、三〇年十二月癸丑の條。

35 同卷一八二、二九年六月庚子の條。

36 同卷一八二、二九年六月戊申の條。

37 同卷一九〇、三一年五月甲午の條。

38 同卷一八三、二九年九月甲午の條。

39 同卷一八八、三一年正月戊戌の條。

40 同卷一九〇、三一年六月壬寅の條。

41 同卷一九二、三一年八月甲辰の條。
註40に同じ。

42 同卷二〇〇、三二年六月是月の條。

43 同卷一九八、三二年閏二月癸未の條。

44 同卷一九〇、三一年六月壬寅の條。

45 同卷一九三、三一年十月壬戌の條。

46 同卷一九三、三一年十月辛丑、同卷一九四、三一年十一月乙酉、同卷一九三、三一年十月癸丑の條。

47 同卷一九一、三一年七月戊寅の條。

48 同卷三三七、王之望傳。

49 同卷三八七、陳良翰傳。

50 中興小紀卷四〇、紹興三二年十二月の條。

51 要録卷一九八、三二年閏二月乙亥の條。

52 同卷一九六、三二年正月甲午の條。

53 同卷一八八、三一年正月庚子の條。

54 同卷一九八、三二年閏二月甲戌の條。

55 同卷一九九、三二年四月辛卯の條。

56 撰者未詳、中興兩朝編年綱目卷十四（靜嘉堂所藏抄本）隆興元年十一月、陳康伯・周葵・湯思退・洪遵らの言。

57 南宋書卷十四張浚傳。

58 同前。

59 宋史卷三八三、陳俊卿傳。

60 註67と同じ、ここでの宰相・執政群の建言は注目すべき内容をもっているが、詳論は別の機会に譲りたい。

61 中興兩朝編年綱目卷十四、隆興元年十一月の條。

62

- ⑥③ 宋宰輔編年錄卷十七、隆興二年九月辛丑、王之望參知政事の項、宋史卷三七二、王之望傳。
- ⑥④ 南宋館閣錄卷七官聯上、宋史卷三八五、錢端禮傳。
- ⑥⑤ 宋史卷三八五、錢端禮傳。
- ⑥⑥ 註⑥⑤以外は全て攻媿集卷九二、觀文殿學士錢公行狀による。
- ⑥⑦ 永樂大典卷三一四八引く陳康伯傳。
- ⑥⑧ 全文卷二四、隆興二年十一月の條。
- ⑥⑨ 宋史卷三八五、周葵傳。
- ⑦① 宋宰輔編年錄卷十七、隆興元年十二月丁丑、張浚右僕射の項。同前、隆興二年四月丁丑、張浚罷右僕射の項。

- ⑦② 中興兩朝編年綱目卷十三、紹興三二年六月朱熹封事の條。
- ⑦③ 全文卷二四、隆興二年十二月の條に引く「龜監曰」の文章、宋宰輔編年錄卷十七、乾道四年八月辛亥、劉珙罷同知樞密院事の項、同、乾道六年五月、陳俊卿罷左僕射の項、南宋書卷四五、張栻傳。
- 〔付記〕
- 本稿は昭和五十一年度文部省科學研究費補助金による「建炎・紹興年間における政治過程と南宋朝權力の構造」の研究成果の一部である。

Reflections on the Political Process after the Death of Ch'in Kuei 秦檜

Jun Teraji

In this article the author takes the position that after the death of Ch'in Kuei the power blocs of the Southern Sung 南宋 were comprised of a number of different political groups, and that the political history from the late Shao-hsing 紹興 era to the early years of the Ch'ien-tao 乾道 era is one of discord between these groups in matters relating to decisions of the highest national priority. The author classifies the political groups of this period into: (1) those who came from the economically advanced Chiang-nan 江南 region, who sought national control over local self-rule, and called for coexistence with the Chin 金; and (2) those who came from the economically backward Szechwan 四川 -Fukien 福建 area, who sought the establishment of a political system firmly based on local rule, and advocated confrontation with the Chin. After the death of Ch'in Kuei, the former group took power, but the latter group soon gained influence, expelled the former group, seized power themselves, and led the war between the Sung and the Chin from the end of the Shao-hsing reign. However, in the process of enacting a war policy, they needed the cooperation of the former group. Thus, when avoiding a complete national breakdown became China's most important political dilemma, the former group moved back into the center of the political arena and concluded the peace treaty between the Sung and the Chin.